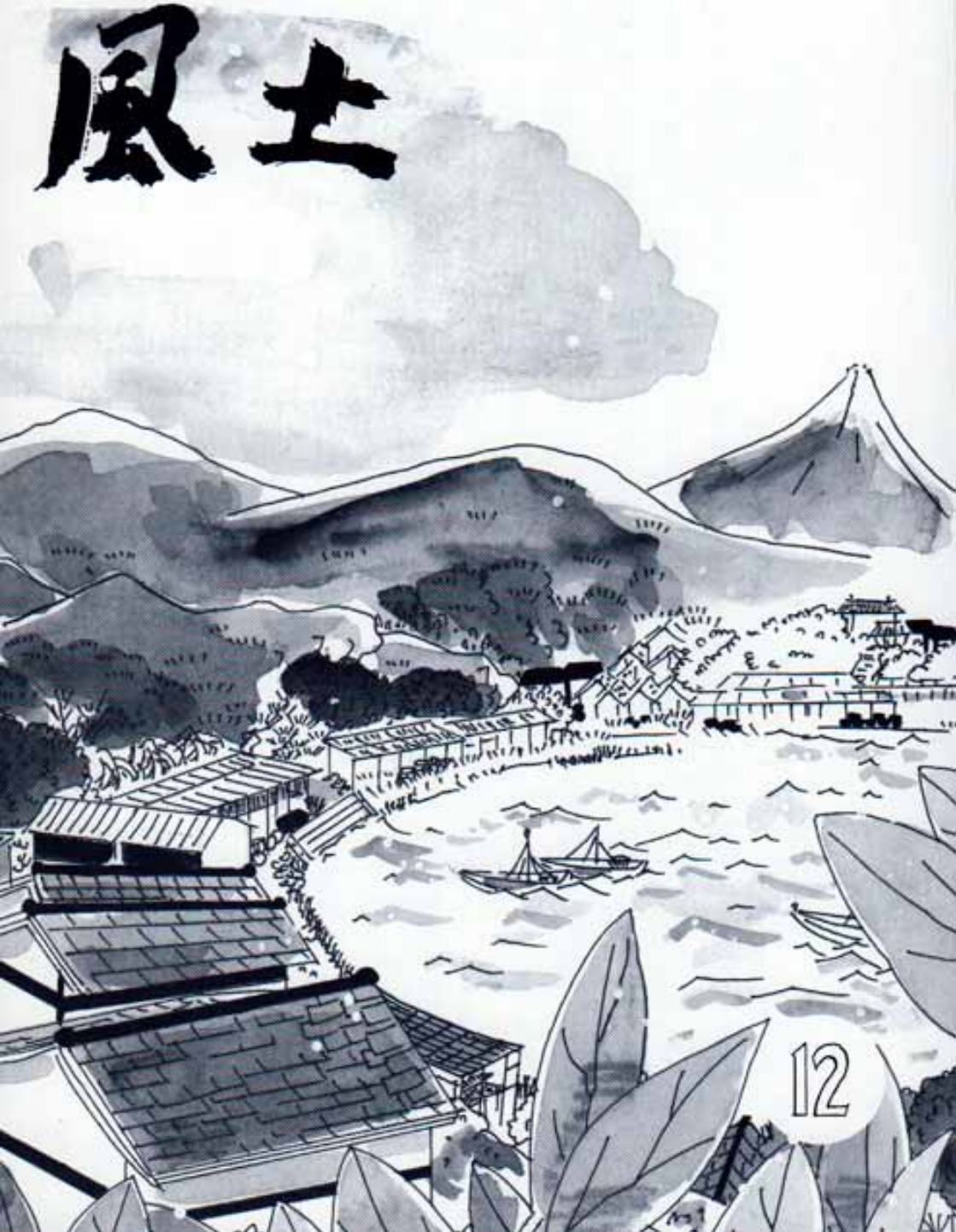
令和3年12月5日発行（毎月5日1回発行）
第61巻12月号（通巻709号）

風土



12

石川桂郎俳句鑑賞

南　うみを

手鏡にわが家を結ぶ雪の畦

（句集『含羞』より昭和三十一年作）

桂郎師は小康状態を機に、友人の結婚式に出たり、原稿の仕事を済ませたりなどの無理がたたり、またもや喀血してしまいます。四畳小屋に臥せる日が続く中、見舞の品が届きました。それはなんと手鏡です。何故手鏡かというと、小屋から竹藪を透かしてわが家があるからです。わが家には妻と二人の子供が、快癒を祈っています。起きるのもままならぬ桂郎師は臥して、手鏡に映るわが家に見入るのです。友の粋な計らいです。

二月盡く肺の笛鳴り子にかくし

（句集『竹取』より昭和三十二年作）

この句には「退院」と前書があります。いっこうに病状が改善しない桂郎師は、昭和三十一年の三月に武蔵野の日赤病院に入院します。さらに東京医科歯科大学の病院に転院して、肺剔手術を受けています。すでに四十七歳となっていた桂郎師は、術後の回復が遅く、退院できたのは三十二年の二月末のことでした。久しぶりに子供に会えたものの、「肺の笛鳴り」を子供に聞かせたくなかったのです。

神蔵器俳句鑑賞

南　うみを

一つ咲く白佗助は月の使者

（句集『氷輪』より平成二十年作）

脳梗塞で倒れて以来、遠出はできるだけ控えていたのですが、出版社からの群作の依頼もあり、伊豆大島の椿祭に出かけた時の作品です。「椿祭はじまる島の怒濤かな」の句もそのうちの一つで、器師の胸の高鳴りが伝わります。器師は華やかな椿よりも、「白佗助」の清楚さに惹かれ、「月の使者」と詠んでいます。器師にとって月は死者の魂の棲む星で、白は魂の色です。亡くなられた奥さんと対話しているのかもしれません。

西行のさくらみにゆきたまへるか

（句集『氷輪』より平成二十年作）

この句には「悼　浜明史」の前書があります。器師にとって前年の丹波日ノ谷山成就院での句碑建立で、再会したのが、最後になってしまいました。明史氏は病気を押しての参加でした。器師と明史氏が、時間を惜しむように寄り添っていたのを、筆者も憶えています。その一年後の桜のころ、平成二十年四月四日に、明史氏はこの世を去りました。「明史さん、西行の桜を見に旅立ったのですね」と呼びかけています。

PDF= 俳誌 @ salon
PDF= 俳誌 @ salon

田の神

南うみを

丹後国分寺址　五句

秋風や焼けし礎石を踏めばなほ

律令の石の上ゆく秋津かな

出来秋や国司の如く丘に立ち

うすら日に礎石の冷えて草の花

雪舟の橋立の水澄みにけり

秋燕のひたすら空を押し上げて

ある時は雲に消えつつ棚田刈る

雀らのたちまち稲を襲ふ眼に

おほ空に棚田の稲架の浮く如し

天心ゆ棚田つらぬく鵙の声

田の神を送る太鼓ぞ雲は秋

蔓たぐり終へたる空のよそよそし

PDF= 俳誌 @ salon

PDF= 俳誌 @ salon

竹間集

同人作品

稲の花　高村　令子

大那岐の風が風追ふ稲の花
秋揚羽急げ日暮れが追ひかくる
白芒剪つて野の風軽くなる
無人駅また無人駅曼珠沙華
満月光この平等や村百戸
子の癒ゆることのみ祈り今日の月
一と粒と涙は数へ月光下

鳥威し　土井三乙

栗の毬裂け充実の色を見す
牛鳴いて鯖雲うろこ零したる
秋灯消す読み止しの書を積み足して
灯ひとつ消し忘れたる夜長かな
おまけとふ花屋の芒抱き帰る
路地にまで転がり出でし榠樝の実
畢寛はお日様頼み鳥威し

望の夜　林いづみ

雲を脱ぎ聳ゆ甲斐駒柿の秋
詣でたる甲斐の帰りは手にすすき
長き夜のことに分厚き山盧集
みちのくの朝市のぞく白露かな
黒々と蝦夷富士せまる望の夜
月今宵おほかた減りぬ白ワイン
秋茄子と届くみようばん塩砂糖

花野道　小林　共代

何処までが裾野か富士の花野道
空白の刻旅にあり秋の蝶
神に庭曼珠沙華の紅と白
『暗夜行路』書きにし部屋の秋湿り
御城下の釣瓶落としや坂の急
夕ちちろ箱階段の黒光り
工事場の鉄の匂ひや十三夜

藪枯らし　中根　美保

起こしたる熾のごとくに秋の蟬
秋扇を挟まむとして帯固き
暗がりに銀水引の紙燭めく
大瓢四方を吊られてなほ育つ
藪枯らし木を乗つ取つて木の容
おほつぶの葡萄つめたき胃の腑かな
路辺に売る名残の瓜や一遍忌

一人酌む　間島あきら

波の上に鋭き波立てる鳳作忌
出港す夜霧に丸き灯をつれて
新藁の夜風に匂ふ遠州路
校正の一字一句や小鳥来る
珈琲のふくろ驢馬の絵金木犀
これやこの雨降嶺産の新豆腐
一人酌む酒は「太閤」夜半の秋

月の道　内藤　静

開山の尼のご廟へ吾亦紅
新月や海鳴り遠くより来る
水溜めてためて糸瓜の残されし
空からの便りのやうに小鳥くる
ＣＴの画像の瑕瑾なき白露
返信に返信の来る夜長かな
来る人か去りゆく人か月の道

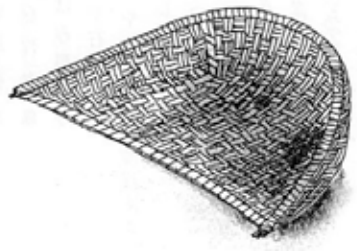
PDF= 俳誌 @ salon
PDF= 俳誌 @ salon

白桃　土井ゆう子

白桃のつるりと剥けて晩年なり
水かけて土蔵を壊す残暑かな
爽やかや時報メロディー市庁より
秋の海さらにふるさと遠くして
毬栗を踏みつけてみる期待感
一株の鬼灯残る更地かな
投函を済まし帰りの小望月

秋天の岬　森高　武

湾に添ふ雲の生まれて鳥渡る
おにぎりを買ひ秋天の岬まで
岬より眼下に鮭の上る川
きちきちの跳んで日差しのやはらかし
大欅の樹下のベンチや小鳥来る
海を見る人に近づく秋の蝶
爽やかに風はポプラの葉を鳴らし



山河集

同人作品

南うみを選

吾亦紅心ほのかに詠はむと　赤石　梨花

水澄んで咀嚼静かな老姉妹
澄む水を晩鐘の韻過ぎにけり
名月を物干場より仰ぎけり
磔の如く案山子の負はれゆく

青空の遠ひぐらしの風に乗る　根岸　善行

今日の月雲に摑まりつつ上がる
温め酒あたため酒と言ひながら
満天の星に応へて虫時雨
蜥蜴の尾ゆるりと穴に入りにけり

シェフ・マルコス歌ひつ刻む唐辛子　岡本　尚子

秋澄むや谺は母の声をして
いま誰か我が名呼びけり風芒

東大寺

秋風や柱に釈迦の鼻の穴
終点に目覚め見回す虫の闇

穂孕みの匂ふ裏口盆の月　小原芙美子

みたらしの琥珀の照りや豊の秋
片雲のうつろふ迅さ早稲は黄に
傾ぎしは傾ぎしやうに秋手入れ
校門前ガードレールに稲を干す

つくつくし止みて幽かに木魚の音　瀬戸　薫

芋嵐ノックのごとく戸を叩く
群れをなす蜻蛉乱世のごとくなり
浮き上がる薬缶の蓋や初嵐
門扉なき家秋風の吹き抜ける

PDF= 俳誌 @ salon
PDF= 俳誌 @ salon

風土独語／南　うみを

吾亦紅心ほのかに詠はむと　　赤石　梨花

「吾亦紅」は秋の花の中でも、特に淋し気な風情があります。花びらが無い故かもしれません。それがまた俳人の詩心をくすぐるのです。作者は「吾亦紅」に佇みながら、この花のように力まずに、「心ほのかに」俳句を詠むべきと言い聞かせているのです。

蜉蝣の舞ひ尽くしたる湖に月　　岡本　尚子

「蜉蝣」は体長一センチほどの羽虫で、幼虫は三年ほど水中で過ごし、空中へ出て羽化すると、交尾し数時間で死にます。この「舞ひ尽くし」は、命の限りを尽くして舞うということです。「蜉蝣」の命を終えた湖には、煌々と月の光が差すばかりです。ここには生死を越えた美の世界があります。

今日の月雲に摑まりつつ上がる　　根岸　善行

この句は「名月」を擬人化して、その有り様を詠み手に伝えています。「雲に掴まりつつ上がる」というのは、「名月」が雲に見え隠れしながら上がっていく様子のことです。「名月」が、よいしょよいしょと、自らを励ましながら上がっていくとも。おそらく作者の年齢がこのような発想をさせています。

糸瓜よけつつ先生の近づき来　　高橋まき子

「先生」がどのような人物かはわかりません、が、糸瓜棚の奥からやってくるので、糸瓜を育てている翁かもしれません。「よけつつ」が、糸瓜の豊作を伝え、ユーモラスな場面を見せています。

傾ぎしは傾ぎしやうに秋手入れ　　小原芙美子

「秋手入れ」は、夏の間に伸びすぎた庭の木々を、秋になってから刈って手入れすることです。「傾ぎしは傾ぎしやうに」から、伸び放題になった庭木が見え、その木の赴くままに刈っていることが解ります。作者の庭木への愛着が伝わってきます。

秋蝶の骸を風の裏返す　　谷田明日香

自然の命の有り様を、ありのままに表現することでリアリティが生まれている作品です。自然の命を見つめる眼がないとできません。「風の裏返す」で、秋の風の冷たさと強さも伝わります。

浮き上がる薬缶の蓋や初嵐　　瀬戸　薫

秋が近づくと、台風の前触れのように強い風が吹きます。これを「初嵐」と言います。作者は滾る湯に躍る蓋と、この「初嵐」を取り合わせました。どちらも力強さでつながっています。

風土集

南うみを 選

新宿に「母と子の森」小鳥来る　　相模原　岡本　尚子

蜉蝣の舞ひ尽くしたる湖に月

忘るるはひとつの手段花すすき

雁渡し峠の茶屋の力餅

かなかなや電灯ともす谷戸の朝

一身を杖に預けて水の秋　　横浜　赤石　梨花

古みちの葎括られ小望月

とめどなく岬に寄せる望の潮

秋の夜の筆の命毛いとほしむ

手鏡の細かき彫りも十三夜

糸瓜よけつつ先生の近付き来　　逗子　高橋まき子

教室に持ち込む風船葛かな

白粉花や音止む工場の昼休み

保育園にバギー置き場や小鳥来る

脚の砂払ふ二人や秋一日

大水青窓を叩くや魂祭　　舞鶴　谷田明日香

母のまた茶碗落とすやそぞろ寒

蟻羽虫割れ無花果に溺れをり

笊盛りの石榴を買うて山の宿

秋蝶の骸を風の裏返す

からからと乾びて風の唐辛子　　横浜　三好　康子

貝割菜寸土の畑に犇めけり

選ばれて間引菜となる生命かな

いたいけな生命摘むなり菜を間引く

貝割菜真白きひげ根一つづつ

朝顔の藍にはじまる一と日かな　　高槻　六車　佳奈

逆光に人は影なる九月かな

雨音を瀬音とおもふ今朝の秋

虫の夜の入れ替はりたる主旋律

群青の夜を揺らして虫しぐれ

PDF= 俳誌 @ salon
PDF= 俳誌 @ salon